慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国の教育近代化と女性への影響： 『中国新女界雑誌』にみえる女性観の考察を中心として
Sub Title	Modern education and Chinese girls study abroad to Japan
Author	関根, ふみ(Sekine, Fumi)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.9, (2012.) ,p.13- 22
JaLC DOI	
Abstract	The theme of this article is Chinese young women who studied abroad in Japan at the end of the Qing dynasty up until the Revolution of 1911. The educational reforms at the end of the Qing dynasty proposed a departure from traditional education. Accordingly, the promulgation of the education of Chinese young women, whose social activities were at the time still severely restricted by traditional customs, was an important theme of modernization. Japan was study modern technology and thought. Women also accompanied their fathers, brothers and husbands and studied in Japan. The young women who studied at ladies' academies in Japan in the early 1900s absorbed much modern thought, and their social activities. This article examines the image of womanhood which these young women developed.
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20120000-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国の教育近代化と女性への影響

―『中国新女界雑誌』にみえる女性観の考察を中心として ―

関　根　ふ　み

Abstract

The theme of this article is Chinese young women who studied abroad in Japan at the end of the Qing dynasty up until the Revolution of 1911.

The educational reforms at the end of the Qing dynasty proposed a departure from traditional education. Accordingly, the promulgation of the education of Chinese young women, whose social activities were at the time still severely restricted by traditional customs, was an important theme of modernization. Japan was study modern technology and thought. Women also accompanied their fathers, brothers and husbands and studied in Japan. The young women who studied at ladies' academies in Japan in the early 1900s absorbed much modern thought, and their social activities. This article examines the image of womanhood which these young women developed.

はじめに

日清戦争の敗北が明らかとなった中国では、亡国の危機を克服し列強の干渉から逃れるため、制度や技術面での近代化が急務となった。国民教育は近代国家建設の重要な項目とされ、女子教育もこの時初めて重視されるようになった。中国人女性の日本留学は、中国が教育の近代化を推進した初期の段階で始まる。

中国女性史研究においても、清末の女子留学生については、日本における活発な革命活動が注目され、中国人女性の歴史を辿る上で不可欠なカテゴリーとなっている。さらに先行研究から、中国人女子留学生の概要についても、かなりの部分が明らかになった。しかし、当時の中国では学の無い女性が好まれる傾向にあり、教育を受けても男性のように社会で活躍できるわけではなかった。こうした清末の社会において、女性を国外へ留学させることにどのような意味があり、また日本で学んだものを中国人女性たちはどのように女性の問題と結びつけたのだろうか。

本稿で取り上げる『中国新女界雑誌』は、1907年に中国人女子留学生によって東京で発刊され、中国や東南アジア地域にも普及した雑誌で、社会に貢献した女性の紹介や婦女論を多数掲載している。この他、日本での留学生活についての記事もあり、中国人女性の日本留学について考察するうえで興味深い内容が多い。これまでも先行研究で紹介されてきたが、筆者が問題としている点についての考察は充分に行われていない。日本で学んだ先進的な女性たちは現実に向き合う問題をどのように捉え、新しい時代の女性像を提示したのかを以下で考察していく。

1. 先行研究のまとめ

これに先立ち、中国女性史研究の中で『中国新女界雑誌』を取り上げた研究を以下にまとめる。

夏暁虹［1995年］[1)]は、清末の歴史を「纏足」という中国独特の風習から考察し、纏足反対運動と当時女子教育が必要とされた理由を関連付け、中国社会に女子教育が普及するとともに女性の社会活動が活発化していく過程を明らかにした。同時期に発刊された雑誌を広範に分析し、『中国新女界雑誌』を含めた女性向けの読み物が、読者の教科書としての役割を果たしていたことを示した。中国人女子日本留学生については、組織力の高さを評価している。

末次玲子［2009年］は、日本留学が始まり、最初のピークを迎えた時代について「二〇世紀初頭は、文化の植民地主義的拡張を進歩と考え、それが手放しで謳歌された時代」[2)]と捉えた。さらに、「清朝は女子学校教育の確立によって政権の安泰をはかり、列強はその分野で自国の権益を強めようとしていた。とはいえ、女子学校教育の確立は中国の女性にさまざまな面で解放をもたらした」[3)]と、当時の情況を分析している。そのなかで『中国新女界雑誌』は、男性に代わって女性が「最新学説を発明する」ための雑誌として紹介されている。しかし、女子留学生が日本で行った活動に重点が置かれ、雑誌の発刊は活動の一環として扱われている。

以上は女性史のなかで中国人女子留学生を扱った研究であるが、そのなかで取り上げられているのは、1900年初頭から辛亥革命直前までの留日女学生の情況であった。これらの研究は日本で女性のための組織を立ち上げ雑誌を出版し革命活動にも参加するという、それまでの女性には考えられなかった社会活動を活発に行ったことが注目されている。

さらに、日本における中国人女子留学生を中心に扱ったものに、周一川［2000年］の研究がある。周の研究は、清末から国共内戦終了（1949年）までの幅広い期間を扱い、日中留学史のなかの女子留学生について研究を進めた点で数少ない貴重な研究である。民国期の中国人女子留学生については、留学生受け入れに最も積極的であった実践女学校以外のいくつかの女学校に関してもそれぞれ考察を加えた[4)]。また『中国新女界雑誌』から中国留日女学生会の活動を分析し、同会の主な活動が来日する女子留学生を支援することだったことを指摘した。

以上の通り、中国女性史研究のなかで中国人女子留学生は、女子教育の普及と旧道徳からの解放という視点から論じられてきた。清末から辛亥革命までの時期を中心に研究が進められ、

辛亥革命以降の中国人女子留学生の概要も明らかにされている。しかし全体的には女性の革命活動に重点が置かれ、当時の女性が対峙した中国の現状については考察が及んでいないといえる。

2．清末の女子教育と反纏足運動

清末の思想家梁啓超は、女子教育の普及と反纏足運動に力を入れ、女性の無学や纏足が好まれていた中国社会に、男性と同じように女性が学ぶことの正しさと纏足の弊害を示した。男女同学と反纏足は、『中国新女界雑誌』が特に主張するところでもあるので、本節にて女子教育における梁啓超の活動を簡単にまとめる。

中国の女子教育は、19世紀半ばに外国人宣教師のアルダーシーが女学校を設立したのをそのはじまりとしている[5)]。女子教育の重要性が中国人の間でも認識されるようになったのは、維新変法運動のさなかであった。1895年、日清戦争の敗北により半植民地化した清国では、国内の近代化推進を目指す官僚や知識人を中心として維新変法運動がおこり、そのなかで反纏足運動とともに女子教育を普及させようとする活動が始まる。1897年梁啓超は『時務報』に、「女学堂設立を倡える啓」という記事を載せ[6)]、そのなかで「聖人の教えは男女平等で、教えを施し学問を勧めることに区別はない」と、女性に教育することも正しいことであると呼びかけた。

梁啓超は、1896年の『時務報』から十数回にわけて、国民の教育レベルの底上げと学校設立の重要性を論じている[7)]。1897年には女学についての論文とそれに引き続いて「試辦不纏足会簡明章程」が掲載され、女子教育の重要性と纏足の弊害が示された。

その後、梁啓超ら改革派官僚が女学校規則制定のために尽力し、民間知識人の努力によって女子教育の基礎が形成された。当時の女学校規則はその第一条に「学堂の設置にあたっては、ことごとくわが儒聖の教えを遵守し、学内には至聖先師の位牌を供えるべし」[8)]とあるように、中国の伝統的道徳観が残るものであった。しかし、梁啓超が「儒教の教え」を借りたのは、当時の中国社会には女性は教育を受けない方が良いという価値観が強く、女子教育を道徳的に正しいものとして理解させるうえで、必要な条件であったとも考えられる。

3．中国人女性の日本留学

中国人の日本留学は1896年に張之洞が日本側と交渉し、嘉納治五郎が清国人留学生を受け入れたのが最初とされている[9)]。1900年代に入ると、各省の官僚が教育制度の視察のため日本を訪れるようになる。東京都立中央図書館の実藤文庫には、実藤惠秀が集めた各省官僚の視察報告書が所蔵されている[10)]。多くは『東遊日記』[11)]と題されているこの報告書には、中国人官僚が視察した日本の小学校から大学までの各校の様子や女子教育の情況が記されているほか、工場の視察についても記録されている。当時日本の産業技術はアジアでトップクラスだったが、

その産業を支える労働者をどのように育てたのかということに官僚たちの関心があつまっていたのである[12)]。

こうして中国人の日本留学の数は徐々に増加し、1902年には欧米留学を超えるまでになった。清末に日本を訪れた中国人留学生については詳しい統計がなくさまざまな説があるが、実藤惠秀はそれらをまとめて1905 ～ 1907年のピーク時には約８千人の留学生が日本にいたとしている[13)]。

そうした留学生の中に、父兄とともに日本を訪れた中国人女性もいた。中国で最初の女子留学生は、三歳で両親を亡くしアメリカ人宣教師に引き取られた金雅妹とされている。金雅妹は両親を亡くした後、父の友人であった宣教師のマッカーテー博士に引き取られ、1870年前後の６歳のときに来日し18歳まで日本で修学した。その後医学を志し、渡米している[14)]。これ以降も日本では徐々に増加する中国人留学生に伴われ、女子留学生も増加していく。日本で中国人女子留学生の受け入れに積極的であったのは、下田歌子が設立した実践女学校であった。この外、女子美術学校、成女学校、高等圭文美術女学校、活水女学校、東京女医学校、日本女子大学校、東洋女芸学校、女子音楽学校、東京女子高等師範学校、東京音楽院、東京蚕糸講習所、奈良女子高等師範学校、府立第一高等女学校、共立女子職業学校、女子学院、高等女子実修学校、三輪田女学校、大成女学校、英和女学校、東亜女学校等も中国人女子留学生を受け入れた。女子留学は1907年に139名に達し、ピーク期の1910年までに毎年100名以上の中国人女性が日本で学んだ[15)]。

これだけ日本に中国人留学生が集中した理由は、張之洞『勧学編』で日本留学の利便性を強調したほか、前節で紹介した梁啓超の『時務報』のなかでも、日本の教育を高く評価する論文が度々掲載され、張之洞の『勧学編』とあいまって日本留学に関心が集まったためと考えられる。梁啓超は、「国いずくにか強くせんや、民智これ国を強くするなり。民いずくにか智とならんか、天下の人を盡して書を読ませ字を識らせ、これ民の智なり。徳美二国は、その民百人中字を識る者、殆ど九十六七人、欧西諸国是を稱ふ。日本は百人中字を識る者、亦八十餘人。中国は文明をもって五洲に號するも、百人中字を識る者、三十人に及ばず」[16)]と述べ、欧米に次ぐ日本の識字率の高さを示している。

さらに、当時中国国内の近代化は発展途上で、学校教育制度も整っていなかった。先進的な教育が受けられ、かつ落ち着いた環境を考慮するならば、隣国の日本には好条件が揃っていたといえる。また、多くが父兄の留学に伴った「随伴留学」であったということは、男性の留学制度に付随する形でなければ、女性に留学の道が無かったことを示している。

４．『中国新女界雑誌』にみる中国人女性が目指した新しい女性像

『中国新女界雑誌』は、1907年に発刊された女性雑誌である。主編者は燕斌（煉石）で、女

性の伝記、基礎的な科学知識の解説などを掲載し、女性による新思想の発明を第一の目的としていた。この他、日本での生活を背景にした小説や、女子留学生の宿舎での生活なども掲載している。さらに、留日女学生会が初めて来日する中国人女性に対して手助けをするという記事が掲載されるなど、日本留学の魅力と安全性を読者に伝えていた。『中国新女界雑誌』は、中国や東南アジアの華人社会にまで流通した雑誌で、中国以外の地域でも部数を伸ばした点でも興味深い雑誌である[17)]。

寄稿者のなかでも多くの記事を書いているのは煉石（燕斌）で、彼女は第一号の「発刊詞」も執筆し、そのなかで次のように述べている。

> 地球上の国において、領域の大小、人口の多寡を問わず、女性がどこでも全国民の半分を占めるのは常識である。その女性を暗黒のままにしておくならば、男性社会が文明的に開化したといっても、その開化はまだ半開化であるというべきだろう。女性を暗黒のままにしておきながら、男性のみで開化を進められるという道理はないのである。欧米諸国はその理由を深く知り、女性の世界に開明主義を実行して、男子と同等の教育を受けさせた。[18)]

このように、女性が社会で重要な位置を占めていること及び教育の必要性を訴えた。また、中国社会では旧い道徳習慣が男女を不平等のものとして女性の精神を否定し、その存在をなきものとしていると説いた。さらに、幼児期の教育を重視し、男性と密接な関係にある女性が高い理想を持たないのは、男性の士気を下げ、甚だしくは民族の勢力を衰えさせて経済困難に陥ると主張した[19)]。だからこそ、女子教育に対する理解が社会に必要だと煉石はいう。

> ただ心より望むことは、当事者が徒に物質欲を尊ぶ教育を行わず、きっとその新しい道徳による教えを発揮して、新しい思想を活発にするようにして欲しいということである。このようにして、一女子を教育することは即ち、国家が真に一女国民を得るということなのである。（中略）吾中国には広々と四百余りの洲があり、雑誌刊行も夥しい数にのぼる。しかし、私たち女性自身が自力で経営し発行したものは、かつて一誌も目にしたことがない。これは私たち女性の恥というべきだろう。そういうことであるから新女界雑誌は、これが世に出て負うところの義務はしばらく論ぜず、まずは私たちの女性同胞の家に一冊置き、手元においてその主義、主張をよく考察し、それを実行していただきたい。さらに、私たちの男性同胞がこの雑誌の主義主張に賛成しそれを紹介して、家庭社会に普及させてくれることを願うばかりである。そうすれば、旧弊を改良し、国民の育成に着手し始めたということができるだろう。[20)]

『中国新女界雑誌』は家庭の旧道徳習慣の中にいる女性たちに、女性にまつわる新しい時代の言論や主義主張を紹介するとともに、男性の賛同を得て家庭内から中国社会を変えていくことを意図していた。

煉石の「発刊詞」について考えてみると、夫婦を中心として作る家庭を社会の末端と捉えて、その一翼を担う女性が開明されることで、国民が育ち国家繁栄に繋がるという発想がうかがえる。そのためには、女性が新しい学問を学び、世界の情勢を見据えて家庭を支えなければならないという、家庭重視の女性論を展開している。こうした論調は、佩公など他の寄稿者にもみられた[21]。それとともに煉石の言葉からもう一つ垣間見えるのは、当時の中国社会では女子教育がまだ充分に理解されていないという意識である。女子教育の次の手段として彼女が考えているのが、女性の手による雑誌の普及であった。そのためこの「発刊詞」には、メディアの力を利用して「家庭に一冊置きその主義主張をよく読んで実行していただきたい」といって、男性にも女性の重要性について学習させようとしている点がみてとれる。煉石のこのような主張から、当時の中国社会では女学校が増えたといっても女子教育或いは女性の社会的地位を向上させることの意義が、それほど定着していなかったという実情がうかがえる。

そうした中国社会で女子教育の推進や女性の社会進出を押しとどめているものは、中国社会に根深く残る旧い道徳習慣であった。第一号では伝統的な男尊女卑の価値基準に異議を唱える記事が多く、第二号は巻頭から纏足を批判している。これも煉石によるものだが、纏足について、以下のように述べている箇所がある。

> 吾中国社会には、女子に対する非道徳的行為に世界で類をみないものが有る。それはすなわち纏足である。（中略）人は誰しもその身体を重んずることは、常識的な感情で当然のことである。[22]

このように纏足が中国社会の道徳観念である仁にも反する行為であることを指摘し、女性は人としての扱いを受けてこなかったことを強調した。

ここで重要なのは、良家の女性に生まれた以上、纏足をするのが当然の運命であった人生に、「纏足をしなくてもいい」という生き方を提示していることである。それは、維新変法運動期に梁啓超らによってすでに言われていたことではあるが、学校教育を受けた女性たちが新しい時代を生きるのに必要な条件として、良縁を得るのに必要だった纏足を止めることを受け入れた点が重要である。とはいえ、坂元ひろ子が纏足は中国の生活に根付いた習慣で、西洋思想を受容する過程で恥とされたことを指摘し[23]、纏足をほどく過程で女性たちが精神的肉体的に無理を強いられることになったことを詳述したように、纏足をほどくこともまた楽な道ではなかった。

それまで当然とされてきた習慣が、実は男女を区別し女性を差別するものであるという概念を理解させるには、近代教育を徹底させ、女性に対する誤った扱いについて女性自身が気づき、家庭環境から変えていかなければならないというのが、『中国新女界雑誌』の執筆者たちが目指した新しい女性像であった。

おわりに

以上、維新変法運動から辛亥革命直前までの中国人女子留学について考察した。中国人女性は父兄に伴われて来日し、日本の女子教育による教養を身につけた。女子留学生の一人である煉石が『中国新女界雑誌』の「発刊詞」において力説した、女性による女性の言葉を伝えるための媒体として、女子教育の次に雑誌の重要性を考えていたことは非常に興味深い点である。さらに『中国新女界雑誌』についていえば、女性が社会で認められるには、まず男性と同じ目線で話しあえるだけの知識と身体が必要であるという主張がみられたが、それは中国社会の当時の道徳習慣を打破して初めて達成されるものであった。父兄にとって「随伴留学」の目的の一つは、女性の自立よりも新時代にふさわしい妻としての教養を身につけさせることであっただろう。しかし、日本に連れて来られた女性たちが新しい思想を吸収し、女性の言葉による新思想を追究し始めたことは、女性の進歩であり日本留学の特徴であったといえるのではないだろうか。こうした点をさらに明らかにするためにも、雑誌を手掛かりとして個別の調査を行うことを今後の研究の課題としたい。

注

１）夏暁虹［1995年］『晩清文人婦女観』作家出版社、藤井省三、清水賢一郎、星野幸代［1998年］『纏足をほどいた女たち』朝日新聞社。

２）末次玲子［2009年］『二〇世紀中国女性史』青木書店、2009年。22ページ。

３）末次玲子［前掲書］23ページ。

４）周一川［2000年］『中国人女性の日本留学史研究』国書刊行会、2000年２月24日。第二章「民国期における情況（一九一二～一九二七）」の第三節「中国人女子留学生を受け入れた官立三校」では、東京女子高等師範学校、奈良女子高等師範学校、東京高等蚕糸学校について、それぞれ当時の情況を紹介している。

５）夏暁虹［1995年］（41ページ）は「一八四四年、イギリス人宣教師アルダーシー（Miss Aldersey）女史が寧波で女塾を開設し、翌年には十五名の学生が同校に在籍していた。通説では、これが中国大陸で最初の女学校である」としている。夏氏の記述は China Education Commission［1922］の情報による。この資料によるとアルダーシーは、1833年にシンガポールでイギリス人女性が組織した “The Society for Promoting Female Education in the East” の宣教師として、1842年にジャワ島で中国人少女のための学校を設立した人物と記録されている。彼女は1842年に南京条約によって五港が開港されると中国に赴き、1844年に寧波で女学校を設立したという。また同資料では、1847年～1860年の間に開港された港で８校のミッション系女学校が設立されたとしている。

６）梁啓超［1897年a］「倡設女学堂啓」『時務報』第45冊、1897年。

７）梁啓超が学校論を掲載したのは、「論学校一・變法通議三之一・総論」『時務報』第５冊、第６冊、「論学校二・變法通議三之二・科挙」第７冊、第８冊、「論学校十三・變法通議三之十三・學會」第10冊（原文は「十三」となっているのでそのまま記述したが、次に続く番号が「四」となっていることからタイプミスと判断し、三番目においた）、「論学校四・變法通議三之四・師範学校」第15冊、「論学校五・變法通議三之五・幼学」第16冊～第19冊、「論学校六・變法通議三之六・女学」第24冊、第25冊、「論学校七・變法通議三之七・譯書」第27冊、第33冊、「學校餘論・變法通議三之餘」第36冊、の計15回。（第１冊～第17冊までは光緒22年（1896年）発行、第19冊～第36冊までは光緒23年（1897年）発行）

８）夏暁虹［1995年］46ページ。

９）実藤惠秀［1960年］『中国人日本留学史』くろしお出版、1960年。

10）実藤惠秀［1940年］「東遊日記研究序説―付、東遊日記目録―」『日華学報』第82号、日華学会、1940年、１ページ。

11）清末の中国では、日本に対していくつかの呼び名があった。「東遊」の「東」は「東洋」の意味で日本を指し、「東遊日記」は「中国人日本旅行記」という意味になる。このほか日本を示す「東瀛」「瀛洲」「扶桑」「蛤洲」「三島」を冠した題名がある。（実藤［1940］１ページ）

12）実藤文庫には、光緒４年（1878年）からのコレクションが収められていが、光緒20年代から宣統年間のものが大半を占めている。

13）実藤惠秀［1960年］61ページ。

14）最初の留日女学生については、実藤［前掲書］が1901年としたのを小野和子も引き継いでいる。しかしその後、石川洋子が当時の留学生雑誌『浙江潮』第三期付録「浙江同郷留學東京題名」により、浙江

省出身の９歳の夏循蘭という女学生が1899年に来日したとした（「辛亥革命期の留日女子学生」東京女子大学学会史学研究室『史論』36、1983年、32ページ）。さらに周一川［2000年］の研究で金雅妹の来日が明らかになり、末次玲子［2009年］でも最初の留日女学生を金雅妹としている。

15）周一川［前掲書］84ページ。

16）梁啓超［1896年b］「沈氏音書序」『時務報』第４冊、1896年。

17）周一川は、シンガポール『中興日報』1908年２月24日の記載から、当時の販売部数を比べている。それによれば、「民報　一万二千份、中国新女界　一万份、雲南　五千份、復報　八百份、衛生世界　六百份、天義報　五百份」であったという。周一川［2000年］79ページ

18）煉石［1907年a］１ページ。「國於地球之上無論彊域之大小人口之多寡、其女界恒居全國民數之半此常例也。使其女界黑暗、則雖男界開明、亦只得謂為半開化国、而女界黑暗者其男界必無獨能開明之理。欧美諸強國深知其故、對於女界實行開明主義與男子受同等之教育。」（句読点、邦訳は執筆者による。以下、『中国新女界雑誌』の句読点、訳は執筆者によるもの。）

19）煉石［1907年a］「發刊詞」『中国新女界雑誌』第一期、２ページ。

20）煉石［前掲書］３ページ。「但深望當事者勿物質的教育、必發其新道德而活潑其新思想、斯教育一女子即國家眞得一女國民。（中略）吾中國茫茫四百餘洲、雑誌之作亦云夥矣。然出於吾女界所自力經營者曾獲一睹、非吾女界恥乎。然則新女界雑誌之出世其所擔負之天職何如姑無具論、惟願吾女同胞家置一冊、人手一編察其主義觀其言論、而見諸實行更願男同胞賛成而紹介之令其普遍於家庭社會之間、則亦始非改良積俗就國民之一助已。」

21）『中国新女界雑誌』、第二期、35ページ。

22）煉石［1907年b］「女界與国家之關係」『中国新女界雑誌』第二期、３ページ。「吾中國社會對於女子更有最不仁之行為世界所未有者、則纏足是矣。（中略）人各自愛其肢體其常情。」

23）坂元ひろ子［2004年］、特に「第３章　足のディスコース」において、オリエンタリズムの視点を含んだ深い洞察を展開している。

参考文献

阿部洋編［1982年］『日中関係と文化摩擦』巌南堂書店、1982年。

夏暁虹［1995年］『晩清文人婦女観』作家出版社1995年、（藤井省三監修、清水賢一郎、星野幸代訳『纏足をほどいた女たち』朝日新聞社、1998年。）

厳安生［1991年］『日本留学精神史―近代中国知識人の軌跡』岩波書店、1991年。

坂元ひろ子［2004年］『中国民族主義の神話―人種・身体・ジェンダー』岩波書店、2004年。

三崎裕子［1988年］「東京女医校・東京女子医学専門学校中国人留学生名簿」『辛亥革命研究』８、1988年63～72ページ。

実藤恵秀［1940年］「東遊日記研究序説―付、東遊日記目録」『日華学報』82号、１～23ページ。

実藤恵秀［1993年］『中国人留学史稿』［小川　博編・解説］　不二出版、1993年。

実藤恵秀［1960年］『中国留学生史談』第一書房、1981年。

周一川［2000年］『中国人女性の日本留学史研究』国書刊行会、2000年。

小野和子［1978年］『中国女性史―太平天国から現代まで』平凡社、1978年。

石井洋子［1983年］「辛亥革命期の留日女子学生」東京女子大学学会史学研究室『史論』36、1983年、36～37ページ。

大里浩秋、孫安石［2002年］『中国人日本留学史研究の現段階』御茶の水書房、2002年。

中華全国婦女連合会［1995］『中国女性運動史―1919～1949』中国女性史研究会編訳、論創社、1995年。

二見剛史、佐藤尚子［1978年］「中国人日本留学史統計表」『国立教育研究所紀要―アジアにおける教育交流・アジア人日本留学の歴史と現状』第94集、国立教育研究所、1978年３月、99～118ページ。

白水紀子［2001年］『中国女性の20世紀―近代家父長制研究』明石書店、2001年。

末次玲子［2009年］『二〇世紀中国女性史』青木書店、2009年。

梁啓超［1897年a］「倡設女学堂啓」『時務報』第45冊、1897年。

梁啓超［1896年b］「沈氏音書序」『時務報』第４冊、1896年。

煉石［1907年a］「發刊詞」『中国新女界雑誌』第一期、１～３ページ。

煉石［1907年b］「女界與国家之關係」『中国新女界雑誌』第二期、１～４ページ。

邵艶、船寄俊雄［2003年］「清朝末期における留日師範生の教育実態に関する調査：宏文学院と東京高等師範学校を中心に」『神戸大学発達科学部研究紀要』第10巻２号、383～398ページ。

『中国新女界雑誌』重刊、幼獅文化事業公司、1977年。

『強学報・時務報』印影版　中華書局、北京、1991年９月。

China Education Commission［1922］“Christian Education in China, The Report of the China Educational Commission of 1921-1922” *The Education of Woman* Commercial Press, limited shanghai 1922